

能登瓦の町並み

のとしま臨海水族館へ向かう車中、ふと目の前の景色が気になった。そこにあるのは、海岸から丘陵地が続くなんの変哲もない町並みである。

しばらく眺めていると、小さな漁港を中心に広がる集落が実に能登らしい漁師町の姿をしていることに気づいた。

能登では、黒瓦の屋根が一般的でなじみが深い。

しかし、最近では色々な屋根材や、カラフルな瓦などの家が増えてきているので、こつした一面に広がる黒瓦の町並みには新鮮な感じさえ受けられる。黒い釉薬瓦の密集した家並みは、能登独特の風景だと聞いたことを思い出した。
気になった光景はこのことだったのである。

能登島曲町

集落手前のバス停には、曲入口との表示、能登島曲町である。

能登島曲町は七尾北湾に面する能登島の中央部に位置し、かつては勾村・鉤村とも書かれていた。この地名は、集落が海岸線に沿って曲がっているようにあるためつけられたといわれている。

対岸を走る県道からは、海岸線に

沿って曲がり、その背後の丘陵地にかけてのびる家々が、すべて海を眺められるように建てられたかに見える。また、県道を進み丘陵地の上からは、能登瓦の黒い波が海へとつながっているように見える。

家々の屋根は一定方向ではなく、限られた土地と地形を巧みに利用しているためであるうか、色々な方向に向いている。このため、黒瓦の屋根が入り江の波のように、陽光をあげてそれぞれ異なった輝き方をしている。

名馬「池月」

ある石垣が海岸近くの宅地から丘の上の耕地まであちこちに見てとれる。

丘の上から北西にある牧鼻（能登島向田町地内）という岬にかけてがかつて「島馬」と呼ばれる馬を産していた地域であろうか。そこにはつぎのような伝説が残っている。

「義経の時代に曲に住む農家が牧山（能登島向田町地内）に子馬を放していた。その子馬は、いつも伊夜



集落へ入っていくと、自然石を利用したような石垣が目を引く。丸い石や、板状の石などそれぞれに統一された石垣は、日本らしい美意識を感じさせてくれる。山が低く、平野が少ない地形を十分に生かすため、斜面や海岸にある自然石を利用し、土留めにしたものであるうか。風情の



陽光に輝く能登瓦